愛と摂理

加藤博重（岡山中央きりスト教会・牧師）

昭和二十二年五月二十五日、埼玉県秩父市上町の日本基督教団秩父教会(ホーリネスの群)で洗礼を受けて三十二年。献身し、教職になって二十九年。その信仰・奉仕生活を顧みると感慨無量なものがあり、ただただ神の救いの恩寵の賜物と感謝しています。

その出発は二十一年七月、初めて教会の門をたたいたことに始まります。そして二十二年四月十一日、「罪人のかしらなる私をあわれみ、救いたまえ」と祈り、神の前に悔い改め、イエス・キリストを救い主と信じ、罪の赦しと救いの恵みを確信するに至ったわけです。

太平洋戦争も末期の昭和二十年五月二十三日、当時私は麻布獣医畜産専門学校に在学中でした。防空当番に当たっていたところ、深夜空襲になり、米機 B29 の大編隊が飛来、前と後と斜め左から三機が千メートルの低空で学校上空を通過、百数十発の油脂焼夷弾を落として行きました。

その一発が屋根を貫き、防空壕にいた私の右腕肘関節に当たったため、複雑骨折を起こし、肉はまくれ腕はぶら下がってしまいました。寸断直前の腕をかかえるようにして、降りしきる焼夷弾の雨と火の海の中をくぐり、空襲下で死人やけが人の続出する病院に収容されました。しかし、空襲警報解除までは手術ができず、野球のバットでなぐられたようなしびれの伴う苦痛と多量の出血に悩まされました。

止血のために、腕の根元を太いゴムでギリギリ巻いて三時間あまり、ようやく警報が解除され、手術が行なわれました。翌日、教授らの相談の結果、専門医院に移されることになり、煙と残火のくすぶる焼野原をタンカで運ばれました。爆創は縫合してはならないのに縫合したため、化膿して高熱が一か月も続き、言語に絶する肉体的苦痛に泣きました。化膿は長く激しく、体力的限界が来て、医師は右腕切断を勧めましたが、私は拒み続けました。実に六か月にわたる入院生活の末の回復は、まことに医師、看護婦、母の看護、父の必死な薬と食料さがし、愛の労苦の結果でした。

退院して、父の郷里秩父へ行きました。叔父、叔母、いとこらは天理教布教師でした。私は毎朝熱心に天理教会を訪ね、道を求めましたが、救いの道は得られませんでした。

今、私たちの教会には九名の身障者の会員がいます。いずれも救い主に来たるまで、霊肉の深刻な苦しみを経験されています。生来の身障者はたいへんですが、途中からの身障者も同様です。私にとって、健康回復と復学の戦いは非常に困難なものでした。見えるものにより比較したり、絶望したり、うらやんだり、のろったり、ひがんだりで、いつも心に平和がありませんでした。自殺をも何度か試みました。しかし教会と母の愛をとおし、私は罪人に独り子を賜わった父なる神の愛を知るに至り、全身がそろってゲヘナ(地獄)に入るより、片手片足になっても天国に入ることの勝ることを教えられました。そして、「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」の主の招きにあずかり、信仰による救いを経験したのです。

もし祈りと答えがなければ、私は死んでいたでしょう。数々の祈りに主は答えられました。祈り始めて、父は十八年目、母は二十五年目に救われ、主を告白しました。今は父なる神のいますみ国にいます。

振り返るに、神さまは救いのために万事を備えてくださいました。苦も、貧乏も、戦災も、すべては神のご計画とご摂理でした。神のご摂理とは「最後的に人を最善に導く神のご意志」です。神は善・光・愛です。すべての悪を善に変えられます。私もこうして主に救われ、主の救いの名をほめ、主のために働く者とされました。

「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています」。(ローマ八・二八)